

2019. 9. 10

畑 啓之

兵庫県いなみ野で一番古い池は入ヶ池か？ それにまつわる美女伝説も含めて

稲美町史（昭和 57 年、全 1193 頁）を読み切った。稲美町は兵庫県の南部に位置しているが高台であるために水に恵まれず、畑多くして田少なという地であった。ここに住む農民の暮らしは常に水を求め、水のために村同士の争いが起こる、そのような地であった。

この大地を流れる川は草谷川と曇り川の 2 つであるが、ともに水量が多いとは言えない。草谷川は大地を深く削り、そのために川面は台地よりはるか下に位置する。従って、農業の用に供するには不向きであった。

それでも、江戸時代には、草谷川の上流から、そして曇り川から台地に水を引く努力が続けられ、その多くは池を作って貯水することになった。これが、いなみ野台地に多くの池がある理由である。



次ページ以降に、稲美町史から池の名前とその面積、建造年が記された表を転記した。ここには主な池だけが記されているものと思うが、その建造年の多くが江戸時代以降であることが特徴である。

ところが、入ヶ池だけはとびぬけて古い。そのいわれが、稲美町史に記されているので、以下に引用した。

いなみ野台地が本格的に水田化されるのは、明治になってからである。明治期に淡河川より淡河疏水が、そして明治～大正期に山田川より山田疏水が完成し、台地におびただしい水が供給されることとなった。ただし、両川ともにその水量には限りがあるので、やはりいなみ野の多くの池に農閑期にその水を貯水して稲作に備えるする必要があった。

そして現在、山田川には呑吐ダムが作られ、そちらからも農業用水が供給されるようになった。いなみ野においては、今年も稲穂がたわわに実り、すでに刈り入れが始まっている。

24 広谷池

淡河疏水が完成したときに、その水を受け入れた記念すべき池である。池の袂にはその記念碑が立っている。

<http://www.alchemist.jp/Blog/190718.pdf>

106 入ヶ池

この池はとびぬけて古く、飛鳥時代である。以下に、その言われ等を稲美町史、加古郡誌から引用した。

68 経ノ池、69 芦池（共に野寺地区）

飛鳥時代と古い。野寺の高蘭寺（こうおんじ、650年頃法道仙人の開基）と関係している可能性あり？

番号	池名称	所在地	池面積	灌漑面積	建造年
1	加古大池	加古、南大池	ha 49.4	ha 324.0	万治3
2	見谷上池	〃 見谷東	1.0	} 11.5	大正末
3	見谷下新池	〃 見谷西	2.6		
4	見谷西新池	〃 〃	1.2		
5	七軒屋池	〃 七軒屋	2.0	6.0	大正末
6	茨池	〃 千和池裏	7.0	32.0	
7	新茨池	〃 講屋裏	3.4	37.0	} 26.0
8	四軒屋池	〃 見谷東	1.8		
9	四軒屋新池	〃 〃	0.6		
10	孫太夫池	〃 鴨ヶ岡西	1.5	8.0	} 9.0
11	三軒屋池	〃 三軒屋東	1.0		
12	善平池	〃 〃	0.8	1.0	} 12.0
13	六軒屋池	〃 六軒屋南	3.0		
14	大沢新池	〃 大沢西	1.7	5.0	} 16.0
15	八軒屋池	〃 上新田	1.7		
16	青野池	〃 池ノ内中	4.0	19.5	} 1.5
17	見谷小池	〃 見谷南	0.2		
18	東池(西川)	〃 池ノ内南	1.3	5.0	明治36
19	北新田小池	〃 北新田南	1.6	4.9	} 2.0
20	見谷北新池	〃 見谷	0.6		
21	奥ノ池	〃 加古	2.7	5.0	} 8.8
22	竹谷池	〃 〃	2.6		
23	広沢池	母里 蛸草	3.5	} 102.0	} 明治40改
24	広谷池	〃 〃	14.0		
25	自分池	〃 〃	1.0		明治40 元禄16 明治24増

番号	池名称	所在地	池面積	灌漑面積	建造年	番号	池名称	所在地	池面積	灌漑面積	建造年
51	長富池	母里 草谷	1.3	1.5	} 23.7	26	茨池	母里、蛸草	0.7		} 7.0
52	草谷池	〃 〃	2.0			27	百丁場池	〃 印南	1.5	7.0	
53	魚住池	〃 〃	3.0		28	西池	〃 〃	4.2	2.4	〃 26	
54	宮谷池	〃 〃	1.0	} 1.2	29	泉池	〃 〃	1.5	5.8	〃 29	
55	〃	〃 〃	0.5			30	南場池	〃 〃	4.0	14.5	〃 26
56	桶荷池	〃 下草谷	1.0	9.0	明治28	31	四塚新池	〃 〃	1.4	} 13.4	〃 26
57	亀ヶ池	〃 〃	1.0	6.0	天保	32	四塚池	〃 〃	3.0		〃 26
58	井沢池	〃 〃	0.5	5.0	} 17.0	33	北池	〃 〃	4.0	16.0	〃 25
59	三字池	〃 草谷	2.5			明治8改	34	南池	〃 野谷	4.0	22.0
60	野畑池	〃 野寺	2.6	1.0	〃 27	35	桶荷池	〃 印南	2.0	9.0	明治28
61	伝治池	〃 草谷	1.0	4.4	} 4.0	36	葡萄園小池	〃 〃	2.0	10.0	〃 34
62	(上)三ツ池	〃 下草谷	0.4			37	葡萄園池	〃 〃	7.8	} 50.0	〃 26増
63	(中)〃	〃 〃	0.3		38	大鳥屋池	〃 〃	0.7			} 30.0
64	(下)〃	〃 〃	0.4		39	中場池	〃 〃	4.6	16.3	明治29	
65	辰巳池	〃 野寺	3.2	12.0	明治2	40	手中池	神出町 紫合	9.0	30.0	〃 26
66	中池	〃 〃	4.6	20.0	〃 28	41	手中小出池	母里 印南	1.5	10.0	〃 〃
67	野池	〃 〃	2.3	8.0	〃 25	42	〃	〃 〃	1.5	10.0	〃 37
68	経ノ池	〃 〃	5.5	17.0	大同年間	43	宮池	〃 〃	4.0	} 20.0	〃 25増
69	芦池	〃 〃	1.4	5.0	〃	44	寺池	〃 〃	1.0		
70	穴沢池	〃 〃	4.3	34.0	明治26	45	福寿池	神出町 吉生	2.5	20.0	明治28
71	大沢池	天満 中一色	1.4	3.5	} 12.7	46	相生池	母里 野谷	5.1	18.0	〃 33
72	尻ヶ池	〃 〃	2.2			47	野々池	〃 〃	9.8	} 48.0	〃 26改
73	中ノ池	加古 加古	1.3	7.6	} 6.4	48	荒内池	〃 草谷	2.3		} 2.3
74	下ノ池	天満 北山	2.5			49	風呂ノ谷池	〃 〃	2.3		
75	凱炭池	〃 中一色	1.3	19.7	明治38	50	風呂谷下池	〃 〃	0.8		

(7) 入之池由緒碑

北山藥師堂(真樂寺) 境内にある。

蛸草ノ庄入之池郷ハ者人皇三十六代皇極天皇之甲辰年、大和国官中藤原彌吉四郎、仍ニツテ勅命ニ西國ニ于行キ通ル折節、此ノ谷ニシテ而老人ノ老人ニ出逢。云々、此ノ野者開ニ老郷一時者末代繁昌ノ地也。汝可ニシテ開見ニ云捨失。君用無レテ滞リ相濟、後、於ニ殿下ニ右ノ話言上ス。早速可ニ老郷開ニ誨ヘ被レ下サ。喜ニテ而趣ニ當處ニ。則彌吉四郎始、北四郎北大三人同年三月五日而始、處々ニ作附、所米能出來。大化三年未年始、而貢米老石、柴十五把ヲ捧。追々民殖、大宝元丁丑年四十六軒也。米二石、柴二十五把捧。然レドモ此ノ三年、春ハ雨降リ夏ハ照リ續ク。故ニ水田無レ足。則谷川登ル事二十五丁。此所ニシテ而廣谷在。是レ幸ニ于同二年春堤ヲ築、處大水ニテ而切レ流ル。翌年春又如レ形ノ築。未ニ央成、一時不思議乎、雨不レシテ降ラ于水出、堤不ニ成就。故ニ不レシテ及ニ人力ニ、捨テシ、和銅七甲寅二月二日、彌吉四郎ノ孫藤原光大衛爰ノ内ニ靈僧顯、云汝ガ父度丈此上ノ谷池築、ト云供不ニ成就。是レ考フルニ掛、水強キ故、如何成堤、築供不ニ成就。是築者堤六枚屏風、形ニ于築、又大水ヲ除者此方ノ山際堤ノ下ニ築、其ノ處而可レ越。必終日ニ美女老人來。其ノ女可レト下爲ニ人柱ト全池成就也。話ニ隨、爰ニ覺。早則三月十八日而如レ話ノ池築。四月十二日如レ案ノ老人ノ美女來。直ニ切リ伏堤ノ柱ニ入レシ處、其ノ後池不レ切、全爲ニ成就。故ニ女ノ以テ靈名ヲ入之池ト名、其池掛三筋有。南谷者谷形百五十間程、奥不レ知。中谷者谷形千八百間程、奥不レ知。此ノ中谷養老三己未年五月、大雨降、故、村長(年以)池ノ様子見ニ行キシ時、満水セリ。中谷者水強キ谷成リ。見レ池ノ外堤形出來。爲メニ水満々トシテ波打、在。故ニ池ノ北際ノ下堤切、半日間ニ半也。不思議成者、此ノ時池ノ外堤形無シ也。溜水池來リ又満水ト成。從レ是レ中谷儀外波谷川ト号名。北谷者谷形七百五十間程、奥不レ知。此ハ谷ニ于白雉年中于寺ヲ立。則禁寺ト号。當郷致ニス布施ノ寺居。此北谷天平十戌寅年四月中頃、當郷ノ者禁寺ニ参リ歸ニ于入之池地方回リ、而變生ニ逢。形女ニシテ、丈六尺餘、日丸以テ毛赤、姿輕々成者出。郷人愚馳、戻。彼化粧呼留云、我ガ形ハ鬼成レ共全不レ在佐。和銅七甲寅年四月十二日、池堤爲メニ人柱ト成リシ者也。我元ハ此ノ山ニ于五百餘年住居スル鬼也。人数來、故替レ姿、美女ト成リ、行キ于不レ思切、伏セル柱ニ。其ノ時怒リ起、相果。於今ハ者仍池就、民思レ恩喜、事無シ限。我其、後根白止池ニ、姿何處ニ頭供如レ今。是レ元化粧界ヲ不出、故、願者汝歸リ里ニ、事ヲ申シテ、而我ガ菩提爲メニ弔ハバ、池守ラレ、民安ク可下爲ニ繁昌、得、云、捨テテ失。行レキテ郷ニ而如レ此、物語故ニ爲メニ化粧、菩提ニ于池水ノ慕、所則谷川流ノ邊宇北山宇建立ス一字。此ノ時旅僧來、而佛像

一体ヲ作り則チ薬師如来ト被レ教ヘ。乃チ此ノ村于米五升ヲ施ス之。后ニ聞ク右ノ僧ハ行基菩薩與被レ爲。此ノ旨大和殿下達ニ上聞ニ。甚ダ御感之上、川上真楽寺與被レ仰セ。則人皇四十五代聖武天皇ノ御宇、天平十一巳卯年建ツル之也。從レ是レ北谷ハ号ニ鬼川原ト。

郷開司藤原弥吉四郎子藤原度丈忰

藤原光大衛

書之弔靈

古稀小山信藏謹写之

(筆写の小山信藏は北山の人。)



入之池由緒碑

入之池の由来については伝承の条(八六八頁)に記している。この由緒碑についての解説は省く。ただこの由来記ないし由緒記の原本は伝わらず、大正三年に発行された加古郡誌に載せられたものが今では一番古いものではないかと思われるが、それも極めて錯簡が多く、甚だ読みにくい。原本は天平十二年に記述されたようになっていたが、記述内容(たとえば人名、上納米等)から考えてそれが真実であるとも思われない。しかし錯簡甚だしく文意の理解しがたい部分の多いのは、やはり相当年数が古く、紙魚などに食い荒らされたものを幾度も書写を重ねて来たためではないかと想像せられる。加古郡誌に採録する際にも少なくとも二種の本文があったらしい。この由緒碑はいかなる本文に基づいて書かれたかは不明であるが、一般に理解され易いよう改変された部分があるようである。原文のままでないところもあるかと疑われる。

真楽寺縁起（入） 西暦六四四年、皇極天皇の三年のことであった。大和国の、藤原弥吉四郎と言つて朝廷が池の由来） に仕えている人が、勅命を受けて西国に行く途中、蛸草村の地で一人の老人に出逢つた。するとその老人が言うには

「この野を開けば必ず末代まで繁昌するであろう。汝がここを開墾して見るがよい」と、こう言い捨てて姿が見えなくなつてしまつた。

弥吉四郎は西国で君用を滞りなく済まし、大和に帰つて早速大君に申し上げ、お許しを得て喜び勇んでこの地へ再びやって来た。そこで北四郎と北大という二人を語らつて開墾に取りかかった。そしてその年の三月五日に初めて種を蒔き稲の仕付けにかかった。幸いに地味もよく、手入れも良かったので稲は大へんよくできた。それから二年後、大化三年には初めて米一石分の稲束を上納することができ、その上、柴十五把も合わせて献上した。この有様を見て他の土地からも人びとがやって来て、それから五十四年後の大宝元年（七〇一）頃には家数も殖えて十六軒になり、年貢米二石分の稲束と柴二十五把が上納できるぐらいになつた。

ところがこの年、春は雨が降つたものの、夏になつて日照りが続きに続いて田に入れる水が乏しくなつた。これまで田に入れる水は、ここを流れる谷川から引いていたのだが、自然に任せていたのでは間に合わない。そこで谷川を二十五町ばかり上つて行くとそこに広い谷がある。そこにすでに前年から用水を溜める池の築造にかかつていた。しかし折角築いた堤も大水が出て切れてしまつたので、この年も春になつてまた前通り築いたのに、まだ半分もでき上がらないうちに、不思議や雨も降らないのに水が出て堤が成就しない。これでは人力に及ばぬこととそのままにして打棄てて置いた。

かくて空しく十年余の月日が過ぎて和銅七年（七一四）となつた。それは奈良朝もまだ初めの元明天皇の御代であつた。藤原弥吉四郎の孫の光大衛という人がこの年の二月二日のこと、夢の中で不思議な僧に出逢つた。その僧が言うには

「汝の父は土地を測量して川の上流の谷を堰き止め、池を築いたが成就しなかつた。これは考えて見ると、上流からの掛かり水が強いからで、たといどんな堤を築いても成功は覚つかないだろう。それ故築き方に特別の工夫を凝らして、堤を六枚屏風の形にし、北方の山際の堤の所にうてみ（排水口）を作つて水を越させるとよい。堤を築く工事中に一人の美女が通りかかるだろうから、その美女を捕らえて人柱とすれば池は完全に仕上がるだろう。」

こうして夢から醒めた光大衛は靈僧の告げに従い、こんどこそは成就させたいと、村人たちを集めていよいよ池の築造にかかった。これが三月十八日であった。それから二十数日経って四月十二日、案の如く一人の美女が通りかかった。そこで直ちに切り伏せて堤の柱とした。かくてでき上がった池はその後全く切れることがなかった。その女は名を「入」と言ったので、その名をもって池の名とし「入之池」と名づけた。

この池の掛かりには谷川が三筋ある。南谷、中谷、北谷という。その長さは

南谷 谷形が百五十間（二七〇呎）ほど、その奥は知れない。

中谷 谷形が千八百間（三二七〇呎）ほど、奥は知れない。

北谷 谷形が七百五十間（一二六〇呎）ほど、奥は知れない。

この中谷は、養老三年（七一九）大雨が降る時村長が池の様子を見に行くと、谷一面に満水している。見ると池の外に堤の形ができて、そこにも水が一杯湛えられて波打っている。そこで池の北側の山際の堤を切ると半日の間に水は半分減った。するとあやしや、池の外は堤はも早見えない。池は満水している。これからそこを外波谷川というようになった。

また、この北谷の北に白雉年中（六五〇〜六五四）に建てられた寺があり、野寺と言った。

天平十年（七三八）四月の中頃のことである。村人が野寺から入之池の北方を回って帰る途中、この北谷で変化の者に出逢った。姿は女で、身の丈六尺余（二呎くらい）で、目は丸く毛が赤い。村人が驚いて馳せ戻ろうとすると、その変化が呼びとめて言うには

「わが姿形は鬼ではあるが実は鬼ではない。去る和銅七年四月十二日、池の堤の柱となった者である。私はもと、この山中に五百余年住み馴れた蛇である。人がたくさん集まって仕事をしているのを見て、姿を変えて美女となつて行っていると、思いがけず堤の人柱として切り伏せられた。その時はいかにも残念で怒りが胸に湧き上がった。けれども今となつては、そのために池が立派にでき上がって、人びとはその恩に感じて限りなく喜んでゐる。その後私の魂は池を離れることなく、どこへでもこの姿で現れる。変化の世界から離れることができないからである。お前は里に帰りこのことを人びとに語り、私の菩提を弔ってくれ。そうすれば私はいつまでもこの池を守り続けるであろう。村人はいつまでも安らかに栄え続けるに違いない。」

こう言い捨てて変化の者はどこへか姿を消してしまった。そこで村へ帰ってこのことを物語り、菩提を弔うために、池の水の流れ行く谷川のほとりの地を選んで、十二日を忌日としてその霊を祀り、川上真楽寺と名付けた。この寺を建てたのは去年三月のことで、このことがあつてから北谷を鬼川原と名づけるに至つた。

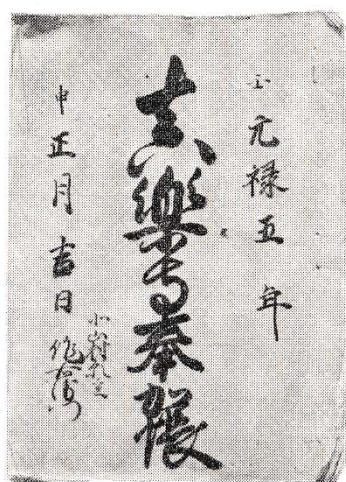
右が入が池の由来であり、また北山という村の発祥をも示しているものである。この真楽寺は薬師如来を本尊として祀っているので、俗に「北山のお薬師さん」と呼んでいる。北山地内の西端、曇川のほとり、徳道・下沢と接する所にある。右の文に依れば真楽寺の建てられたのは天平十一年三月、文の書かれたのは天平十二年ということになる。和銅七年から天平十一年までは二十五年になる。

川上真楽寺の堂記には次の意味のことが書かれていたという。(加古郡誌に拠る)

(前文不明) 谷川の流れのほとりに一字の堂を建立した。この時旅僧が来て仏像一体を作り、薬師如来であると教えた。そのお礼として村人は米五升を布施した。後に聞けばその僧は行基菩薩であったという。このことを朝廷に申し上げると、川上真楽寺という名を賜った。これは聖武天皇の御代天平十一年のことであつた。

又、薬師如来の御台座の裏書に、次の意味のことが書かれている。(加古郡誌に拠る)

川上真楽寺の薬師如来草創の因縁は、聖武天皇の天平十一年の行基の御作である。しかし長い年月の間に御尊体がすっかり破損してしまった。天平十一年から九百五十五年に当たる元禄六年御本尊を再興し、脇土二天を始めて建立し開眼供養した。



真楽寺奉加帳(金守・井上輝夫氏蔵)

右の台座裏書に言うところの元禄六年再興ということについては、元禄五年正月に、北山の医師井上作右衛門という人が願主となって「真楽寺奉加帳」を回し、近隣の人びとから青銅三錢ずつの奉加を募ったことが、今も残っている中村および加古新村その他多くの奉加帳によって知ることができる。たんに蝟草庄のみならず、望理郷や加納庄へも回して極めて多くの人から喜捨を得たものである。

その奉加帳の初めには堂々たる趣意書の序文があり、続いて寄附者の名が載せられている。

序文の一節 「当寺草創の御本願は本朝四十五代聖武皇帝の御宇天平十一年、行基菩薩の御作と云々。雖^モ然物更星移^リ御尊^ニことごとく破壊^ニにおよぶ。庄内の老若再興の望をねがひ思ふといへども檀越^ニ微力にして其節を得ず。空しく月を送り感涙心肝に銘ず。庶幾^ハ十方檀那万人講の御芳志、青銅三錢宛の助成を蒙り、仏像彩色成就せしめんと思ふ。」

皇 極 天 皇

三年甲辰三月

大和國藤原彌吉四郎及び蛸草村北四郎北太等蛸草村に耕作を初しむ

〔古文書〕

蛸草村者人皇三十六代皇極天皇三_{辰甲}年大和國官中藤原彌吉四郎仍勅命西國于行通折節此谷而一人老人出逢出云此埜者開一鄉時者末代繁昌地也汝可開見云捨失君用無滯相濟後於殿下右嚙云上早速可一鄉開而晦被下喜而趣當所則彌吉四郎始北四郎北大三人同年三月五日而始所々作仕付處米能出來大化三_{未丁}年始而貢米一石柴十五把捧追々民出來大寶元_{丑辛}年因十六軒也貢米二石柴二十五把云々

和銅七年甲寅

大和國藤原光大衛本郡に來り蛸草村に住し同年四月入之池を築く

〔古文書〕

此三年(大化)春雨降夏照續故水田無足則谷川登事二十五丁此處而廣谷在足幸于同二年春堤築處大水而切流翌年春又如形築未央成時不思議乎雨不降于水出堤不成就故不及人力捨處和銅七_{寅甲}二月二日彌吉郎(藤原彌吉四郎ノコトカ)孫藤原光太衛□□靈僧云汝父度丈此上谷池築云供不成就是考上源□貳厘餘掛水強故翌如何成堤築供不成就是築者堤六枚屏風形于築又大水除

者北方山際堤下築其所而可越必終日美女來其女可爲人柱全池成就也話隨爰覺□則三月十八日而始如話池築四月十二日如案一人美女來直切伏堤柱入仕處其後池不切全爲成就故女以靈名則入之池名附□池掛谷川三筋有

南谷 谷形百五十間程奧不知

中谷 谷形千八百間程奧不知

此中谷養老三年_和大雨降故村長年以也様子見行時滿水在中谷者水強谷成于見者池外堤形出來爲水滿々被打在故池北際下堤切水半日間半也不思議成者此時池外堤形無也溜水池來又滿水成從是中谷儀外波谷川號名

北谷 谷形七百五十間程奧不知

此谷北干白雉年中干寺立則埜寺號當鄉致布施寺居

此北谷天平十_寅年_寅四月中頃當鄉者埜寺榮歸于入之池地方回利北谷而變生逢形女丈六尺餘目丸以毛赤姿_暎々成者出鄉人驚馳辰彼化粧呼留云我形鬼成俱全不在佐和銅七_寅年四月十二日池堤之爲人柱成者也我元此山于五百餘年住居蛇也人數來故替姿美女成行于不思切伏堤柱其時怒起相果於今者仍池成就民思恩喜事無限我其後根白止池姿何所顯供如今是元化粧界不出故也願者汝歸里事申而我菩提爲串池守民安可爲繁昌得云捨失行鄉而如此物語故爲化粧菩提于則池水慕所吉里內字下澤而谷川邊十二日爲忌日賴僧藥師如來號川上眞樂寺去年三月立從是北谷號鬼川原云々

川上眞樂寺 今單二藥
師堂下云ノコト

〔堂記〕 參考

前文不明—谷川流邊一字建立此時旅僧來テ佛像一鉢作則藥師如來被教此村米五升施之間後右僧行基菩薩而被爲在候此旨大和殿下達上聞所其御號川上眞樂寺被仰候人皇四十五代聖武天皇御宇天平十一年建立云々



入ヶ池

所在地 兵庫県加古郡稲美町北山一二四三

歴史

入ヶ池は、奈良時代につくられたと言われており、次のような伝説が北山の「川上真楽寺縁起」に残っています。

蛸草村では、村人たちが池をつくる準備をしていました。しかし、せつかくつくった堤防が水に流され、池を完成することができませんでした。

十数年の月日が過ぎ去ったある日、この村をきり開いた藤原弥吉四郎の孫である光太衛の夢の中に一人の僧があらわれ、「堤防を六枚屏風の形にし、北の山に近いところに「うてみ(洪水吐)」をつくると良い。そのとき、一人の美女が通りかかるであろう。その女を人柱にすれば、きつと池ができあがるであろう。」と言いました。光太衛は村人を集めて、お告げの通り、池づくりを進めました。すると、二十日ばかり過ぎた頃、一人の美女が通りかかりました。村人は直ちに捕らえ、堤防の柱としたのでした。その女の名を「お入」といったことから、「入ヶ池」と言われるようになりました。その後、昭和五四年の改修工事で、現在の池の形になりました。